

## 阪神淡路大震災関連の記事から

I 第九十六巻第一号（一九九七年一月）より

菊地知子

一九九五年一月に起きた「阪神淡路大震災」の後、幼児の教育では、一九九五年九月から二〇〇〇年一月まで、「震災後の子どもたち」と題する記事をシリーズ化し、後半は断続的なながらも、回を重ねること二十四回に及んだ。そのラインナップは多彩で、幼稚園、保育園における幼い子どもたち、あるいは学童クラブでの小学生の状況にとどまらず、学童クラブに端を発して組織されたボランティアグループ、フリースクール、本屋さんなどの手になる、中学生高校生に触れた記事が存外多いという印象がある。それらどの記事も実に捨て難く魅力的なのだが、以下に、四日市市にある子どもの本の専門店「メリーゴーランド」の店主、増田喜昭氏による記事を見ていきたい。

震災後の子どもたち(13) 中学生とボランティア（一九九七（平成九）年第九十六巻第一号）

増田喜昭（子どもの本の専門店メリーゴーランド）

その日は土曜日だったので、僕はてっきり学校は休みだと思っていた。神戸にボランティ

アに行く人を探していたとき、中学生四人が行きたいと申し出たので僕は「そいつはすばらしい、いい経験になるぞ」と喜んで、彼等を仲間に加えたのだ。

(中略)……希望者も多く、とりあえず中学生以上はOK、ということにしたのだが、その土曜日は学校のある日で、さっそく校長先生から電話でおしかりを受けることになった。それは、二次災害があったらどうするのか、またその責任は誰がとるのか、といった内容で、立場上、校長先生は許可することはできないことはよく理解できたのだが、子どもたちのその気を変えることはできないので、結局ずる休みということにして出発したのだ。

その日は、車四台で焼そば三百人分(材料は細かくきざんでビニール袋などに入れてある)、それと、市の女性課が集めてくれた、生理用品と下着千人分をつみ込んだ。

金曜日の夜、集まった中学生たちのいでたちを見て、僕たちは笑ってしまった。寝袋に着換えなど、まるでキャンプにでも行くような重装備だったのである。そのときもすでに車の中は救援物資でいっぱい、個人の荷物はじやまになるほどだったのだ。

何が必要か必要かは、行ってみて体験しないとわからない。まあいいか、ということで、荷物にうずまった中学生たちを乗せて出発した。

途中、カーブの多い天理の山道で、大量の生理用品が彼等の頭の上にドカドカツと落ちてくるというハプニングもあったが、どうにか目的地に着いた。

そこはもう、あわただしい所で、大学生のボランティアや全国から集まった人たちが、てきぱきと昼、夜なく動き廻っていたので、誰も中学生にかまっている余裕はない。

(中略)僕はこの二日間の中学生たちを見ていて、正直、一日目は、連れてくるんじゃないかっ

た、と思うことも何度があった。やっぱり、自立していないやつはダメだ、と思ったりした。しかし、ひとたび、誰かに喜んでもらえるという実感を持った彼らは驚くほどキビキビと動き出したのだ。

これは、学校や日常生活では味わうことのできない、生きたナマの体験なのである。人が人として人と関わりながら生きるといふ単純な実感を、ひよっとすると彼等は今まで一度も味わったことがなかったのかも知れないのだ。

予定通りの、時間割通りの、学校と塾とクラブ活動の日々の中では感じることでできなかった何かを感じたのではないか。

神戸の仲間たちは、中学生四人にむかって、「お前たち完全にはまったな」と言った。それは、他人に喜んでもらえたという実感のことを言うのだ。「残りたい」「また来たい」と口々に言う彼等を見ていると、まさに、まったと思えるのである。

ボランティア、と言えるほど大したことをしたわけではないし、ほんとにささやかな行動であったのだろうけれど、確実に、彼等の中に残ったものはある。

行動しながら考え、考えながら行動すること、それは教室で机の前でコツコツ勉強すること以上に大切なことなのかも知れない。

幼い頃から、文字や数字を憶えさせることに熱心になっていくうちに、行動しながら考える、遊びながら学ぶ、地域のことを考える、助け合って生きる……そんなこころなを、体感することを忘れていくのではないだろうか。

子どもたちに、もっともっと街に出て遊んでほしい……。そんなことを、中学生と神戸へ

行ったこと（を）思い出しながら考えている。

## 中学生も一人の市民、社会の仲間

中学時代のことを、「刑期三年恩赦なし」と、体制としての学校を批判する恩師がいた。言語障がいのある臨床家として、学校という、往々にして特殊コードしか通用しない場で、痛い思いを余儀なくされている子どもたちとのつき合いが深かったからで、教師や、ましてや児童生徒憎しでは決してなかったことは付け加えておきたい。何にせよ、学校外に、中学生らの居ていい場所がそれなりに心地よく用意されているかといえ、大方の大人は諾という自信がないのではないかと思う。つき合うに面倒な年代だから学校という閉じられた空間で高校受験のための勉強と部活動となけなしの行事だけにその力を注いでいてくれ、満足していてくれ、社会参画はごめん被る、という、ある種の暗黙の排除がありはしまいか。

今般の大災害で、たとえば、避難する道中、防災マニュアルにはない多少の回り道をして近隣の保育園に寄り、園児をおぶって避難した中学生たちがいたことを知るだけで胸が熱くなり、人間は本当に捨てたもんじゃないのだと励まされる。社会があらゆる世代を巻き込んで再生しようとし、力を貸してほしいと願うことと、ここには君たちの居場所もあるのだ、と確認し伝達するということは、同時に起こり得るように思う。

三月十一日を経た私たちにとって、彼らのことも排除することなく巻き込み、頼り頼られようという人心に、小さくはない希望が見えることを、阪神淡路大震災時の複数の特集記事から改めて確認したように思う。

（お茶の水女子大学）